

幻のスエズ運河

新聞の1枚の写真に目が釘付けになった。何とそれはごく最近 113 年ぶりに広島で見つかった幻の名画である。何を隠そう、それこそ幼い頃「砂漠ってどんな所？」と素朴な興味を抱き、砂漠への憧れを膨らませてくれた絵画の再現だったのだ。しばらくこの世から消えていた近代日本画の巨匠・竹内栖鳳が描いた「スエズ景色」である。欧州留学から帰った栖鳳が、帰国直前にスエズ運河を訪れ運河周辺のラクダと椰子の木を描写した風景画で、幼少期に何気なくそのエキゾチックな複製画を見て魅せられた。栖鳳から半世紀余りを経て亡霊に誘われるように戦禍も生々しいスエズ運河を訪れてみたい気持ちに捉われた。

1967 年第3次中東戦争の硝煙消えやらぬ間に、砂漠の中をカイロから列車でスエズへ向かい、昔のイメージを思い浮かべながら郷愁の運河縁へと歩を辿った。悲しいかな、夢にまで見たスエズの街は、想像とはあまりにも似て非なるものだった。すでに栖鳳の時代から長い年月が経過して、訪れた直前にはイスラエル空軍機の爆撃により港湾施設を始め、市内は徹底的に破壊され、老人、女、子どもらは疎開して市内には人影もまばらで、運河の街・スエズはゴーストタウンと化していた。

実は、その時スエズ市内では未だ戒厳令が解かれず、商店街は荒れ果て生活の匂いや温もりが感じられなかった。スエズ市内滞在許可証を持っていなかったために警察に身柄を拘束されていたが、せめて栖鳳の時代の風に触れてみたいと、その警察施設からこっそり抜け出し、運河までトボトボ歩いてやってきたのである。子どもの頃夢見たラクダや椰子の木が見られた運河縁には、それらの姿はなく、イスラエル機に沈められた幾艘もの船舶の残骸が無残な姿を晒し、その一方で若いエジプト軍の兵士たちが無邪気に格闘技に夢中になっている現実と、のどかな昔の夢のイメージとの落差に暗然とさせられた。

幸いにして幼な子のイメージを膨らませてくれた栖鳳の傑作「スエズ景色」は、いま再び陽の目を見ることになった。いずれ廿日市市の「海の見える美術館」で自分のこの目でしかと見て、半世紀前の臨場感溢れる戒厳令下のスエズと比べながら、あれやこれやひとり想いに浸ってみたいものである。